

## 第3回

# 「ドイツにおける 融和の成功」

今年度は「国際交流は何のために行うか」と題して、様々な視点から国際交流の意義と目標について解説していただきます。寄稿者は、国際関係論、日本学や歴史学等、色々な分野の専門家と協力する予定です。今回は、ドイツ、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所日本学科教授 フォーグト・ガブリエレ先生と同研究所日本学修士課程一年生 ヨルケ・リーザ氏の共同執筆で、数十年前から多文化共生推進課題に取り組むドイツの事例の一つを紹介します。

日当たりのいい日曜日の午後。ハンブルグに近いヴェーデル市。カラフルな公民館の中にインチェス・バリシュとその生徒達が座っています。バリシュも毎週日曜日にここに来る子供達もヴェーデル出身でトルコ系の人たちです。毎週日曜日の午後、バリシュと二人のボランティアが進んでその子供達の宿題を手伝っています。このプロジェクトのアイデアを考え付いたのはヴェーデル市のトルコ系両親の会の幹部の一人、バリシュのお父さんでした。お父さんはトルコ系の子供たちに放課後も学校の勉強を助けてあげる必要があると気付きましたが、最初に導入した家庭教師の補習はあまり評判がよくなかったのです。そこで、息子のバリシュが2年前にそのプロジェクトを引き取り、自分で教え、その子供達の手伝いをはじめたのです。今では毎週日曜日に町中から25人もの子供達が来て、宿題を見てもらっています。そしてバリシュは二人の助手に手伝ってもらえるようになりました。「私たちはどんな科目でも見てあげます」とバリシュは言います。子供達の年齢も様々で、小学生から中学二年生まで色々な学年の子供達がここに来ています。



宿題の手伝い中 ©Lisa Jörke

### ▶ 宿題とドイツ語の手伝い

一緒に勉強している間はドイツ語しか話してはいけないというルールをバリシュは大切にしています。「ドイツ語しか話さないことはこのルールです。多くの子供達は家ではトルコ語しか話さないので、ドイツ語の学校生活とトルコ語の家庭生活との移行が時として難しいのです。」ドイツ語での会話を通じて彼は子供の弱点を見つけることも簡単になります。なぜならドイツ語能力と学校の成績の間には明らかかな関係があるからです。「ここで問題なくドイツ語を話せる子供達は学校の成績もいいのです。」とバリシュ。同時に子供に練習帳のきれいな扱い方や集中力と規律正しい勉強の仕方、子供たちの争いを平和的に解決する方法を教えます。バリシュと二人の助手は子供に対して先生だけでなく、兄や姉のような役割も果たします。そして生徒はバリシュ達に対して尊敬の念を抱いています。全体の話し合いの場でそれは明らかになります。子供達は宿題の補習を授業として感じ取っていますが、バリシュ達の説明のほうが学校の説明より理解できるし、一人より一緒に宿題をするほうが楽しいのです。

### ▶ 両親への支援

しかしバリシュ達によって手伝ってもらうのは子供達だけではありません。ドイツ語がうまく話せない両親やドイツの学校制度をよく知らない両親などもここに相談に来ます。バリシュのお父さんの説明によるとトルコの学校では躰などの教育が全面に出されますが、ドイツの学校では知識教育が大切にされています。「だから多くの両親は学校での必要な準備を怠るのです。」とバリシュ。この助手は定期的に両親と会い、小学校卒業後どの学校に進めばよいかなどの学校に関する進路相談などをします。ドイツでは小学校卒業後、生徒は進学できる学校の種類が三つあります。アビトゥア（大学入学資格）を得て大学に入学できるギムナジウムか、職業教育が可能になる実科学校か本科学校です。進学は両親と子供の意に任されていますが、両親の会は重要問題を解決する援助をします。例えば宿題グループはトルコ人家族と学校の仲介役となり、両親のドイツの役所に対する恐怖心をやわらげることができ

## ▶ 融和に成功したバリシュ

進学のことならバリシュは自分の経験から話すことができます。ヴェーデル市でアビトゥアを取ってから医学を勉強し始めました。そしてドイツのもっとも有名な秀才のための奨学生に選ばれました。移民を背景に持つ大学生としてバリシュは子供たちの模範となりました。差別を身をもって体験したことはありませんが、ギムナジウムの初期には成績の付け方がすこし不公正であったように思えました。にもかかわらずバリシュの両親は学校行事に積極的にに関わり、息子を支援しました。アビトゥアを取るとき、バリシュは先生に奨学生に推薦してもらいました。推薦することで先生はバリシュの成績だけでなく、移民者の子供としてギムナジウムで自己主張した事実を評価したのです。バリシュはそのことを先生にとっても感謝しています。しかし、友達の通っている本科学校を訪問したとき、外国人の子供が十分に支援してもらえない学校もあることが分かりました。それも町の子供達を助きたい理由の一つとなりました。



ヴェーデル市のバリシュ(左)、生徒、助手  
©Lisa Jörke

## ▶ ヴェーデルのトルコ人両親の会

宿題の補習やトルコ人両親の会の他のプロジェクトはヴェーデル市からも援助を受けています。会の建物は市から寄贈され、毎年両親の会は寄付も受けています。数日前に市長がこの会を訪れました。ただ、ほかの市民との繋がりは簡単ではありません。「会の頼みは自分だけです。」とバリシュ。しかし、すべての市民との接点を見つけ出せる兆しも見えています。例えば国際子供フェスティバルです。このフェスティバルは毎年4月に行われ、あらゆる国の人々の間で好評です。こういう行事は外国人融和にとっても町の異文化間共生のためにも不可欠です。

## ▶ ドイツへの移民の歴史

今では融和はドイツ社会における重要なテーマとなりました。50年代から70年代にわたって地中海諸国から、そしてベルリンの壁崩壊後は東欧からの移民労働者が数多くドイツに渡ってきました。それ以来、ドイツは世界でもっとも顕著な移民国となりました。トルコ人社会はその中で最大の移民集団を形成しています。しかし移民の融和政策は遅々として進まず、今なお移民の背景を持つ子どもたちは教育の機会がドイツ人より少ないと言えます。まさにこの問題の対策として、バリシュのお父さんが宿題の補習を始めたのです。彼はヴェーデル市のトルコ系の子供たちをバリシュのようにギムナジウムに行かせ、アビトゥアを取らせてあげたかったのです。「少なくとも年に一人、子供にアビトゥアを取ってほしい」という目標をバリシュは立てています。移民の背景を持つ子どもたちは優秀な成績で卒業することで、将来の仕事を自分で選び、社会の一員として認められることができるのです。

## ▶ 外国人市民の功績

ですから、ドイツの政府は近年移民家庭の子供のドイツ語能力を改善し、そうしてその子供達の教育のチャンスを高めようとしています。しかし、外国人融和は今なお多くの問題を残しています。そこでヴェーデルみたいな小さい町でこそバリシュとのお父さんのような人々のイニシアティブが多文化共生にとって不可欠なのです。しかし、長期的に融和を進めるには移民者側の貢献だけでは足りません。ドイツ人市民も異文化に対して心を開き、移民に対する偏見を捨てなければいけません。移民を自分の生活環境の中に迎え、認めなければいけません。こういう開放性をドイツ側に望みつつ、バリシュは融和が長い時間を要する過程だと理解しています。「その道こそが目標だ」と笑いながらバリシュ。それはドイツやトルコの文化だけでなく、どの文化にも言えることではないでしょうか。



### Profile

#### フォグト・ガブリエレ (Gabriele Vogt)

ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所日本学科教授、「外国人の移住と日本の労働市場」研究プロジェクト・マネージャー、2009年まで東京にてドイツ・日本研究所副所長、上智大学国際教養学部で非常勤講師 写真：©UHH, RRZMCC, Arvid Mentz



### Profile

#### ヨルケ・リーザ (Lisa Jörke)

ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所日本学修士課程一年生、「日本と国際政治」専攻 写真：©privat